

技術士 2 次試験に合格して



鳴島 勤
(なるしま つとむ)

勤務先

株式会社 アリヤス設計コンサルタント
技術部

〒060-0042 北海道札幌市中央区大通西10丁目4番地16ダンロップSKビル2階
TEL 011-233-4700 FAX 011-233-4720
E-mail t-narushima@ariyas.co.jp

■ 専門：応用理学部門(地質)

1. 自己紹介

私が子供のころは札幌といえども自然があふれていました。また、家庭用ゲーム機やパソコンのある家はほとんどない時代でしたので、自然の中で当たり前のように虫取り、川遊びなどをして遊んでいました。そのせいか中学・高校では自然科学への興味を強く抱くようになり、大学では地質学を専攻しました。専門である土木地質という分野は、建設コンサルタント業界に進んだ先輩から聞いた話や、大学生時代に地質調査をお手伝いさせていた時に知りました。大学院終了後、ある建設コンサルタント会社に入社し、トンネル地質調査、斜面調査、構造物基礎調査に従事しました。現所属の株式会社アリヤス設計コンサルタントに移籍後は、土木設計についても勉強しながら地質調査業務を担当しています。

2. 技術士試験に合格して

私と同年代で同じ業界に進んだ方の多くは何年も前に合格されており、ようやく背中が見えた感じがしています。そういう意味で一区切りがついて、今は少しホッとしています。これからは同じように一線に並べるように改めて気を引き締めていきたいと思っています。

3. 試験対策

私なりの技術士二次試験を振り返ってみました。同じ分野で受験される方の勉強の参考となれば幸いです。

○筆記試験

必須問題：科学技術に関する白書、政府諮問機関等の提言に目を通しました。これらの資料はインター

ネット上で公開されていますので入手は比較的簡単でした。新聞の科学技術政策に関する記事も通読するようにしました。これは口頭試問の際の話題づくりにも役立つと思います。

専門問題(地質)：試験問題で問われていることの多くが業務で遭遇する可能性のある事象ですので、技術や手法の基本と応用を確認しながら業務を遂行しました。実際に合格された方から「論旨を整理したメモをその場(試験場)で作れるようにするとよい」と聞いていました。普段の業務でも、技術的課題や対策などを整理したメモを作成するようにしました。その際、乱雑でもいいからアウトラインが分かるものを短時間で作るように留意しました。

○口頭試問

技術的体験論文は、業務報告書から抜粋した図表類がそのままでは見づらかったので、体裁の修正に意外と手間が掛かりました。普段の業務でも図表類にもっと気を配る必要を再認識しました。論文を見ていただいた方からの助言も大変役立ちました。

4. 最後に

2011年(平成23年)3月11日に発生した巨大地震と大津波には、かつて三陸沿岸で防潮堤の大きさを見たことがあっただけに大変驚かされました。また、地震防災体制強化の必要性が認識され始めていた矢先の出来事であり、今回間に合わなかったことは、防災に関わる技術者の一人として残念でなりません。今後も災害に強い国土づくりの一助となるよう努力を惜しまない所存です。



大澤 公浩
(おおさわ きみひろ)

勤務先

遠軽町

経済部建設課(土木担当)

〒099-0414 北海道紋別郡遠軽町1条通北3丁目1番地1

TEL 0158-42-4811 FAX 0158-42-3688

E-mail k.osawa@engaru.jp

■ 専門：建設部門(施工計画・施工設備及び積算)

1. 自己紹介

私は 1975 年(昭和 50 年)に網走市で生まれ、北見工業大学を卒業後、1998 年(平成 10 年)生田原町に入庁し、2005 年(平成 17 年)の町村合併を経て現在は遠軽町に勤務している 35 歳の技術系職員です。

自治体の人口規模が 2 万 2 千人程度と小さいこともあり、私の業務は町道や河川の許認可事務・維持管理、道路事業、河川事業、災害復旧事業等と広く浅く時には深くといった多岐にわたっております。

2. 技術士への経歴

私が技術士という資格を知ったのは勤めてから 3 年程度経過してからであり、その時見た問題は「地域医療格差の解消」といったような内容でして、当時はこんな試験受かるのは別世界の人しか受からないといった印象を受けつつも同時に、技術士というものに強いあこがれも抱きました。

職場としては特に資格を求めておらず、また周囲にも技術士の先輩がおらず取得しなさいと言われたことはなかったのですが、自分自身が精神的に大きな人間というか博識でゆとりのある人物になりたいといった人生観を描いていたので、技術士を取得できるほどの能力を身につけられれば、目標とする人物像に一步近づけるのではないかと思います技術士に挑戦することにしました。

それから技術士への第一歩として 28 歳で一級土木施工管理技士取得、その後 33 歳で一次試験合格、翌年二次試験に初挑戦しましたが不合格、さらに翌年 35 歳で合格といった内容が私の技術士への経歴です。

3. 技術士試験

合格できる能力を身につけるためには合格レベルの論文を書けるようになることが必要だと思い、地

元の技術士会で知り合えた技術士の方に徹底的に添削してもらいました。自分以外の方の客観的な視点が入ることで、自分で気づけなかった事や誤った考えを効率的に修正していくことができ、論文の仕上がりが良くなっていったと思います。

また、論文構成能力とは別に知識も覚えなくてはならないとも思い、白書や省庁の HP、解答例等から項目に対して背景・課題・対応策などに分解し、ノートにまとめ理解するように覚えていきました。

勉強は平日 2 時間、休みは 5 時間程度行うようにし、考えることに疲れたら解答例の模写をするなど、頭を休めつつ筆記能力も上げておりました。

口頭試験では、とある先輩技術士の方から、それっぽくうわべで答えてもダメだ！ 自分の中に芯があれば答えはそこから出てくる！ 試験官はこいつに技術士を名乗らせていいか最後の確認をしているんだからな！と教えられ、勉強はもちろんしましたが試験官とコミュニケーションを取るように臨んだところ良い感じで終えることができ、合格発表日にはちょっと早い春を感じることができました。

4. おわりに

登録後、名刺を初めて渡したとき、今後は間違ったことや程度の低いことは言えないというこれまで経験したことのないプレッシャーを感じました。

そのため今は技術士の名に恥じないように、研鑽は常に行う必要があると責務ではなく自ら思います。

また JABEE 講習を修了した私の後輩にも技術士への意欲の高い技術者が数多くおり、彼らが技術士に挑戦する際は、彼らの一助となることで私が先輩技術士から受けた恩を返していきたいと思います。

最後にお世話になった先輩技術士の方々ならびに本会誌へ投稿の機会を与えていただいた広報委員会の方々にお礼を申し上げ、結びといたします。



鎌仲 修志

(かまなか しゅうじ)

勤務先

株式会社 福田水文センター

環境水工部

〒001-0024 札幌市北区北24条西15丁目

TEL 011-736-2371 FAX 011-736-2393

E-mail s-kamanaka@f-suimon.co.jp

■ 専門：建設部門(建設環境)

1. 自己紹介

私は、1975年(昭和50年)に北海道旭川市で生まれ、高校を卒業するまでは旭川市で過ごしました。

その後、北海道大学水産学部に入學し、札幌市、函館市と移り住み、各都市の風土や文化を楽しみつつ、平凡な学生生活を送りました。

当時、海や魚が好きだから水産学部を選んだのかといえば決してそうではありません。将来、どんな職業に就きたいのかという明確な目標を持っていなかったため、成り行きで選んだ道だったと思います。

今では魚が大好きで、熱帯魚観賞を趣味とし、週末にはアクアリウムショップに足を運んでおります。

2. 技術士試験について

私は大学を卒業後、食品卸売業に勤めていましたが、技術的な仕事がしたいと思い、友人の勧めもあって航空測量会社に転職しました。

その時に初めて技術士という資格を知るとともに公共事業に係わるようになりました。

当時の先輩から、「技術者は専門知識や実務経験のほか、公的な資格の取得も重要である」と教わり、自分が技術者として仕事をしていくためには、まずは測量士を取得することを第一歩として、将来的には技術士になりたいと思い、資格取得に向け勉強するようになりました。

その後、測量士等の取得や技術士第一次試験の合格、現在の職場への転職等、様々なことがありましたが、所定の実務経験年数を重ね、第二次試験の受験資格を得ることができました。

しかし、身近な諸先輩の方々を見ると、知識、経験、洞察力、信頼性など全ての面でレベルが高く技術士のハードルの高さを感じ、技術士になりたい

という「目標」が、いつか合格できればいいという「夢」に変わっていきました。

技術士資格の重要性から、受験申込から模擬面接まで一貫した勉強会が社内でも開かれるようになり、同世代の技術者が合格するようになると、自分も技術士になれるのではないかと、身近な目標として日々精進するようになりました。

私は3回目の受験で初めて筆記試験を合格し、口頭試験に臨むことになりましたが、技術的体験論文など口頭試験に向けた準備は何もしていなかった(今回も筆記試験が不合格と思っていました。)ので、口頭試験までパニック状態でした。口頭試験のプレッシャーから体調を崩した時期もありましたが、家族の支えや先輩技術士からのアドバイスにより、自分のペースを取り戻すことができました。

口頭試験ではかなり厳しい質問が多く、不合格を覚悟していましたが、なんとか合格を手にすることができました。

これまで、私の受験に際し、ご指導下さいました多くの技術士の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

3. 今後に向けて

技術士試験に合格して、社会的責任を自覚し、技術の研鑽に励んでいきたいと考えております。

またこの度、僭越ながら、日本技術士会北海道支部の広報委員に任命され、本号から『コンサルタンツ北海道』の編集に携わることとなりました。

広報委員の活動を通して、諸先輩の方々と交流を深めながら資質向上に取り組むとともに、本誌が読者にとってさらに有益なものになるよう、頑張っていきたいと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。



田原 寛

(たはら ひろし)

勤務先

北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター 国際疫学部門
〒060-0819 札幌市北区北19条西11丁目 JSTイノベーションプラザ
北海道 バイオジェネリック医薬品研究室
TEL 011-708-1605 FAX 011-708-1605
E-mail tahara@czc.hokudai.ac.jp

■ 専門：生物工学部門(細胞遺伝子工学)

1. 自己紹介

私は1978年(昭和53年)に神奈川県で生まれ、父の仕事の関係で兵庫県に移住しました。そのまま県内の大学に進学し、大学院博士後期課程までの長い期間を兵庫県で過ごしました。就職を機に札幌に移住し、今年で5年目を迎えます。

札幌では大学と製薬企業の共同研究に携わっており、共同研究が2008年(平成20年)からJST育成研究に採択され、プラザ内に間借りする形で業務を行っております。主にバイオ医薬品製造のための、組換えタンパク質高生産系の開発を担当しております。

趣味は武道で、大学時代は日本拳法、現在はテコンドーを嗜んでおります。

2. 技術士試験について

私が初めて技術士試験を知ったのは、博士後期過程の3年でした。卒業と就職が決定していた私は、博士号を取得した後に、いったい何を目標すべきか、こういった経験を積むべきか悩んでおりました。大学院まで進んだことからアカデミックな基礎研究の重要性は理解しているものの、もっと応用的に人の役に立たせるにはどうしたら良いか、という気持ちが漠然とありました。そんな時、技術士試験を知り、自分の目標すべきものだと思うようになりました。

一次試験は就職して一年目にクリアしましたが、問題は二次試験でした。生物工学部門はマイナーな部門ですので、参考となる書籍や講座がほとんどなく、いかにして勉強するかが課題でした。過去問題の分析はもちろん、最新の情報を得るために日経バイオテックなどの情報誌をチェックし、各種セミナーや勉強会に積極的に参加するようにしました。なおこの経験は試験だけでなく、日常の業務において非

常に役に立ったのは言うまでもありません。

また二次試験の受験資格を得るのにさらに2年の実務経験が必要でしたので、モチベーションの維持が大変でした。偶然にも職場に同じ部門の技術士を目指す人がいたため、「まけてなるものか」という強い気持ちでなんとか維持しました。

ようやく二次試験の受験資格を取得した年、待望の第一子の出産が重なりました。産前産後のことを考えると、今年は受験を控えようと妻に伝えたところ、「せっかく受験資格を得たのだから子供を言い訳にせず頑張って」と言われました。全くその通りだと思い、昼休みなどの細切れ時間を積み重ね、一発合格を目指しました。

筆記試験では運良く体験した業務の周辺知識が出題され、合格することができました。口頭試験は後悔した部分もありますが、何とか力を出し切りました。ここでは思いのほか、客先でのプレゼンの経験が非常に役に立ちました。合格発表当日、インターネットで夜中に自分の番号を見つけた時は、思わず声をあげてガッツポーズをとりました。

3. 今後について

私の専門であるバイオテクノロジーの分野は、産業として成り立ちにくく、そのため雇用も安定しておりません。そんな中で技術士を目指して日々過ごすことで、自分を強く保ち続け、さまざまな知識や経験、価値観を得ることができたことは、非常に有意義でありました。同様の悩みを持つ方の参考になれば幸いです。

最後になりましたが、私を支えて下さった職場の皆様や指導技術士の先生、そして家族に心から御礼申し上げます。またこのような投稿の機会を与えて下さり誠に有難うございました。



山口 宏幸
(やまぐち ひろゆき)

勤務先

株式会社 ネクスコ・エンジニアリング北海道

札幌道路事務所 施設管理課

〒061-1279 北広島市大曲並木1丁目1-2

TEL 011-370-3257 FAX 011-377-5853

E-mail h.yamaguchi.sc@e-nexco.co.jp (会社)

un1032 luna-yama@r2.dion.ne.jp (自宅←会社へメールして
返答がない場合はこちらへお願いします)

■ 専門：電気電子部門(施設電気電子)

1、自己紹介

1960年3月25日に産声をあげました。この3月25日は電気記念日です。職場の口の悪い同僚から「そんなに電気が好きなら感電したらいいのに」と、からかわれている感電が嫌いな51歳です。

2、趣味

一に5年前に始めた登山で、藻岩山から大雪山まで年間20回程度出掛けています。日帰りの単独行専門で、自慢は1日に最大4万1千歩を歩いた事。

二に、写真です。特に札幌の夜景撮影が好きで、藻岩山や大倉山の知名度の高い山だけでなく、山登りの経験を活かして色々な山から撮影をしています。特に、手稲山や百松沢山からの夜景は絶品です。

三にスキーです。最近は1シーズンに数回しか行かないので、趣味と言えないかもしれません。

3、職場

高速道路の保全点検や施工管理を行っている会社に勤務しています。その中で、私は札幌を中心とする延長約120Kmの電気設備の保全管理全般を行っています。

4、技術士試験との出会い

同僚から飲み会にでも誘うように「山口～。一緒に行こうぜ～」声を掛けられたのが出会いです。その頃は、一次試験の合格が必須になる前だったので、いったい何年前の話だったのでしょうか？(苦笑)

5、受験苦闘期

技術士試験は常に強電系試験と並行して受験し、名付けて“二兎を追うもの一兎も得ず作戦”を遂行してきたのですが、作戦名がトホホなだけあって、長い苦闘期を味わってきました。受験期間が長いと試験制度が幾度か変わり、その対応に戸惑う年もあれば、受験願書を出し忘れて“不戦敗”になってしまっ

た年もありました。

6、今年の試験

筆記試験は手応えが無く、『どうせ、今年もダメだろう』と思っていたら意外にも合格していました。ところが、どうせ不合格だと思っていたので論文提出や口頭試験の準備を、まったくしていなかったのです。特に論文提出は締切日まで数日しかなく、会社で事情を話して休暇を取り、なんとか期限に間に合わせる事ができました。

次は口答試験の準備です。声を出す練習をするために、一人二役で試験官を演じ『技術士の定義を話して下さい』と質問し、自分で声を出して答えるのですが、スラスラと言葉が出ません。とにかく言葉が出るまで、“危ない人”と思われても仕方ない練習を繰り返しました。

そして本番です。待合室の雰囲気嫌で受験室の前の廊下でプラプラしていると、二人の男性が向かって来て挨拶をされました。私も挨拶をするのと同時に、その二人は試験室へ入りました。「もしかして試験官？」そう思った瞬間に超後悔です。なんたって、ポケットに片手をつっ込んだまま、気の無い挨拶をしていたのですから(苦笑)。

試験官は、やはり予想通りの二人でした。そして私の答えに対して『〇〇について、もっと勉強して下さいね』と6回ぐらい指導されたので、合格通知が来るまで不安な毎日を過ごしました。

7、終わりに

“ゆっくりでいい。休んでもいい。歩むことさえできれば到達できる。”この言葉を支えに、ようやく技術士の仲間入りをさせていただきました。これからもよろしくお願いします。